

はじめに

「国語史料としての仮名書き法華経はすでに「足利本」^(注1)「妙一本」^(注2)などについては浩瀚な資料、研究が刊行されているが、研究史の比較的浅いこの分野はなお、新資料の発掘、整理、紹介が必要とされている段階にある。この作業はその一環となることを目指すものである。

「月ヶ瀬本」は古訓点に遡る法華經の訓みを繼承した完本の写本の資料である。識語を欠くがその書写成立は江戸初期と目される。「仮名書き法華經」の国語史資料としての利点の一つには、同一原典の訓読が——書写された時代の言語を反映しつつ——書き継がれてきたため、国語史の事象を通時的に観察することを可能にする点にある。同じ江戸期の仮名書き資料にあっても江戸期に新たに訓読され、延べ書きされたものにはこの資料性は期待できない。この点について既に兜木正亨氏が、「江戸時代の新訓はどちらかといえば漢文直訳調で、訓読みとしての価値は国語として読むことにあるという立場から見ると

中世の訓経よりも劣るといわざるをえない。」と述べている。^{〔注3〕}「仮名書き法華経」を国語史資料としてみると、この事実はきわめて重要であるが、必ずしも広く知られるところとはなっていないので例を添えて別に述べたい。

「月ヶ瀬本仮名書き法華經」は伝統的な訓みを伝える、現存では最も書写成立の遅い完本として極めて貴重な資料である。初回にあたる本稿ではまずその書誌を記し、書写成立の年代、テキストの性格について概説しておく。これらはこの資料のうち、語彙や語法の多彩さが期待されるいわゆる「法華七喻」を含む七品を選び、調査した結果に基づくものである。

妙法蓮華經品第一

くてもいづれさうさびしくは佛王を
あふさぐやせんの中にいたはあらう大
びれも五千人とて之は皆をわらんごん
すむにつけて又めんたふうこらうをい
しりあへるまづつらてあはにござい
ばあるそのなびわかぬけぞん姫うさ
うるびらるるをそをきといせと客利

月ヶ瀬本仮名書き法華經（本文の冒頭）

「月ヶ瀬本」について(略解説)

(一)「月ヶ瀬本」の書誌

中田祝夫博士所蔵。写本の完本。楮紙、袋綴、八分冊(平均57葉)。墨付き、四五六葉。無罫八行。紙高二二、五センチ。紙幅一五、六センチ。行高約一九、五センチ。上欄一、五センチ。下欄一、五センチ。
 〈原本の本文冒頭の影印を前頁に掲示した〉

(二)「月ヶ瀬本」の書写成立年代

「月ヶ瀬本」は識語を欠くがその表記には四つ仮名の乱れ、開合の乱れ、合拗音の直音化が見られる。これらの音韻的特徴は音韻史の近世に属するものであり、書写成立した時期は江戸時代(初期)と推定される。

〈四つ仮名の乱れ〉

和語としては「かづ」「数」——用例のすべて——「なんじら(汝等)」が見られる。字音語には「ちうそく(充足)」などの例がある。

〈開合の乱れ〉

和語としては「しこうして」「而」の例ある。字音語には「しようこ(商怙)」「とうみやう(塔廟)」などの例がある。

〈合拗音の直音表記〉

妙一本で合拗音の表記が「月ヶ瀬本」では直音表記に替わっている。それらの字音語を字音ごとに整理して次に示す。

〔化〕くゑ け 教化・所化・化城・化作・法化
 〔華〕くゑ け 宝華・天華・華光・華足光・名華・人華・

華菓

〔貴〕くゑ け 豪貴

〔快〕くゑ け 快樂

〔外〕ぐゑ け 外道

〔悔〕ぐゑ げ 疑悔

〔毀〕くゑ け 毀戒

〔患〕ぐゑん げん 憂患・患難・苦患

〔眷〕くゑん けん 眷属

〔倦〕くゑん けん 疲倦

〔還〕ぐゑん げん 退還

〈連声〉

「月ヶ瀬本」には他の資料に見られない連声の表記が認められる。いずれも末尾がN音で終わる字音語に格助詞「ヲ」が下接して生じる次のような例である。連声は中世後期(室町時代)にひろく認められた音韻事象であり、「月ヶ瀬本」はこれに近接する江戸時代初期の書写成立と推定される。

① かくのごときの法音の聞て、ぎげことぐく、すでにのぞこりぬ。

(月ヶ瀬本二 10・8)

② すでに、佛のおんのほしじ奉る事をゑつ。

(月ヶ瀬本二 32・8)

③ 方便のもてのゆへに、ねはんのぞうおしめしき。

(月ヶ瀬本四 28・3)

④ 法りむのでんじ、四しゆのために法をとく。

(月ヶ瀬本五 81・5)

⑤ 有時は、こ身のとき、有時は、た身のとき、……

(月ヶ瀬本六 9・7)

(三)口誦のテキストとしての性格

「月ヶ瀬本」には經典内容の取意、理解には結びつかない著しく表音的な表記が目立つ。鎌倉時代(前・中期)の「天理本」「妙一本」、お

よび幾種かの仮名法華經切れには、漢語はすべて漢字で書き、訓読みする語は仮名書きにするという原則が認められたが、「足利本」(鎌倉後期)ではこの原則が崩れていた。「月ヶ瀬本」の表記は次に見るようにこの傾向をさらに強めている。

①仏教要語の漢語が仮名書きされているのが目につく。

「じやうたい(誠諦)」「ぜんなんし(善男子)」「しんげ(信解)」「しんじゆ(信受)」「しやかむに(釈迦牟尼)」「みろく(弥勒)」「しやくし(釈子)」「あしゆら(阿修羅)」……

この類の表記は一般的な語句にも及び類例は甚だ多い。これらは転写の間いづれかの段階において、先行資料の字音の振り仮名を、そのまま本文としたものと考えられる。取意・理解のためには不便であるが、読誦(斉唱)のテキストとしての用に使するものであったに違いない。

②漢文原典の用字に拠らず、同訓異字・同音異字を当てた表記が見られる。

これ〔之〕↓是 その〔爾〕↓其 宝蔵↓法さう

第一↓大一 すなはち〔乃・便・即〕↓則

この〔是〕↓此 また〔復・亦〕↓又 減度↓めつ土

卉木↓き木 示教利喜↓じげう力 ……

右のような類は、依拠した先行資料の仮名表記に任意に同訓異字・同音異字を当ててリライトした結果によると解される。

③他の資料に比べて濁点の施されていることが多い。そのなかには本濁・新濁のいずれでもなく、いわば読み癖かと思われる次のようなものがある。

じゆぎ〔授記〕 ちんぼう〔珍宝〕 じんめう〔深明〕

ぶんぶ〔分布〕 わうげい〔往詣〕 さんだん〔讃歎〕

びにん〔非人〕 てんほうりん〔転法輪〕

う ぶ〔憂怖〕 ふがしぎ〔不可思議〕

右の濁点表記のなかには別筆(淡墨)による後の補記と見られるものがあるが、このテキストが実際に読誦に供された際の書き込みの可能性も考えられる。

④次は仮名書き資料の伝承間の事情を窺がわせる例である。これらは先行資料が仮名書きでなければ生じ得ない事例である。「月ヶ瀬本」の本文(傍線部)は仮名書きされた先行資料を恣意的に解し当て字したため、原典の意味を正しく伝えるものとはなっていない。

ち、つねにこをおもふ事_レべつして、五十よねん。

1 ちち、つねにこをおもふ。こと離別して五十余年。
(月ヶ瀬本二 98・5)

父每念子 與子離別 五十餘年。(漢文原典_{注4} 二二六・7)

2 ちよふんのうつはものをとりて、此所に〔往き〕いたりぬ。
(月ヶ瀬本二 98・5)

除糞のうつはものをとりて、このところにゆきいたりぬ。
(妙一本 三〇〇・3)

執除糞器 往到子所。
(漢文原典 二五〇・4)

⑤語法に関する事柄であるが、訓読文に見られる「曰く」「のたまはく」などと呼応して引用文の末尾に位置する格助詞「ト」は、鎌倉時代前・中期の仮名書きの遺品にはその痕跡を留めている例が多いが、「月ヶ瀬本」には——引用が短小の場合にも——使用が見られない。これもまた、本資料が口誦の国語であったために、背後にある經典の訓読文から離れてしまった結果であろうと思われる。これもまた、「月ヶ瀬本」が口誦のテキストであったこと示すものである。

(四) 月ヶ瀬本の系統

原典訓読の仕方の点からは「月ヶ瀬本」は「妙一本」とは系統を異にするものである。訓読の系統を分かち確かな手掛かりは文脈（構文）の異同である。文脈は訓読に際し、漢文原典の構文の理解によつてきまり、延べ書きを転写する間に生ずることは考えられない。この見地から両本の文脈に異同のある箇所を漢文原典を添えて一、二示しておく。

- | | |
|---|--|
| <p>2</p> <p>むりやうの衆生、むしゆおくの菩薩をどして、佛のちゑに入しめ
たまふ。
無量の衆生をわたし、無数億の菩薩をほとけの智慧にいらしむ。
度無量衆生 無数億菩薩 令人佛智慧
(漢文原典 五二・9～10)</p> | <p>1</p> <p>我、彼どのこうしやの菩薩、しゆくゝのいんゑんをもて、しこう
じて、佛道をもとむるをみる。
われかの土をみれば、恒沙の菩薩 種種因縁をもて、仏道をもとむ。
我見彼土 恒沙菩薩 種種因縁 而求佛道
(漢文原典 二六・15～16)</p> |
|---|--|
- (月ヶ瀬本 一八・1～2)
(妙一本二・6～五・1)
(月ヶ瀬本 四二・5～6)
(妙一本五八・2～3)

- (注1) 中田祝夫編『足利本仮名書き法華経（影印篇）（翻字篇）』（勉誠社 昭和51）
- (注2) 中田祝夫編『足利本仮名書き法華経（索引篇）』（勉誠社 昭和55）
- 中田祝夫編『妙一本仮名書き法華経（影印篇）（翻字篇）』（佛之世界社 昭和63～平成元）
- 中田祝夫編『妙一本仮名書き法華経（索引篇）』（佛之世界社 平成2）
- (注3) 兜木正亨『法華版経の研究（兜木正亨著作集第一巻）』（大東出版・昭和57年）（四九一頁）
- (注4) 『岩波文庫本法華経（上）』による

月ヶ瀬本仮名書き法華経 翻字

〔凡例〕

- 一、極力、原姿に近い形で示すことを心掛けたが、漢字については通行の字体に統一した（但し、頻出する「佛」「經」はそのままとした）。
- 一、仮名は現在通行の字体によった。
- 一、翻字の行取りは、原本と一致させ、頁は上段〔左端〕にゴシックの洋数字で示した。
- 一、原本の仮名遣いは、そのまま翻字した。
- 一、原本の踊字は、そのまま存した。
- 一、字音・字訓のルビはそのまま示した。また、行間に小記された語釈や脱字・脱語の補記等もそのまま残した。
- 一、原本に疑義があると思われる箇所は左傍にママと記し、そのまま残した。
- 一、原本の脱字・脱語は「妙一本」に拠つて〔 〕内に補った。
- 一、原本に脱文のある場合にはその旨を下段に注記し、「妙一本」に拠る本文を末尾の【補注】欄に示した。
- 一、原本の仮名に施された濁点には、別筆（淡墨）で後記されたと認められるものがあるが、そのまま残しその旨を下段に注記した。
- 一、原本には、唱誦のためと思われる区切り点（朱点）が施されていることがある。しかし、翻字にあたって必ずしもそれに拠らず、本文の内容、構文を考慮して、句読点を施した。
- 一、会話、心中思惟は「」を施して示し、必要に応じて『』を併せ用いた。

妙法蓮華經序品第一

かくのごときを、われ、き、き、⁽¹⁾ひと、き、佛、王しや
じやうぎしやくせんの中にちうしたまありき。大

(1) きんたま(りき補注)

(2) 俱(原本)

びくのしゆ、万二千人と共也。皆、是、あらかん也。しよろ
すでにつくして、又、ほんなふなし。こりをたいとく

(3) たいとくせり。

(4) なをは

2 うるびんらかせう・かやかせう・なたいかせう・舍利

弗・大もくけんれむ・まかせんねん・あぬるた・こう

ひんな・けうほんはたい・りはた・ひつれうかはし

や・はくら・まかくちら・なんだ・そんだらなんだ・ふ

るなみたらし・しゆばたい・あなん・らごらといふ。

かくのごとき、しゆにちしきせられたる大あらかん

とうなり。又、がく・むがくの二千人有。まかはしやはだい

びくに、けんぞく六千人と共なり。らごらは、や

3 しゆたらびくに、又、けんぞくと共也。ばさつまか

(1) 俱(原本)

(2) 俱(原本)

さつ、八万人⁽¹⁾皆、あのかたら三みやく三ばだひにお

ゐて、たいてんせず。みな、だらにをゑたり。げう

せつへんざい有て、ふたいてんの法りんをでんず。

むりやう百千のしよ佛をくやうじて、⁽²⁾しよ佛のみも

とにおゐて、⁽³⁾しゆくのとくのほんをうゑたり。常

にしよ佛のために、せうたんせられ、⁽⁴⁾いつくしみをも

て、身をおさめて、よく佛系に入、大智をつうだつ

4 して、ひがんにいたれり。みやうせう、あまねくむりやう

の世かいをきこえて、よくむしゆ百千の衆生をど

す。其なを、⁽¹⁾もんじゆしり菩薩・くわんぜおん菩薩・と

くだいせいばさつ・しやうしやうしん菩薩・ふくそく

菩薩・法しやう菩薩・やくわう菩薩・ゆぜ菩薩・ほう

月菩薩・(月光菩薩)・まん月菩薩・大力菩薩・むりやうりきは

さつ・おつ三かい菩薩・はつだら菩薩・みろく菩薩・

ほうしやく菩薩・導師菩薩といふ。かくのごときらの

5 (菩薩)まかさつ、八万人とともなり。其時に、しやくくだいくわん

(1) わたす。

(2) そのなをは

(3) 供養し、

(4) みもとにして

(5) せられたてまる。

(3) 爾時(原本)

にん、其けんぞく二万の天子⁽¹⁾ととも也。又、みやうくわつ

天子・ふかう天子・ほうくわう天子・四大てんわう有。其

けんぞく、万の天子と共也。じざい天子・大じざい

天子、そのけんぞく、三万の天子と共也。しやは世かい

のしゆ、ほん天王・しき大ほん・くわうみやう大ほんと

うの、其けんぞく、万二千の天子とともなり。八のりう王

有。なんだりう王・はつなんだりう王・しやかりう

6 王・わしゆきつりう王・とくしやかりう王・あなはたつ

たりう王・まなしりう王・うはつらりう王とう也。⁽¹⁾四の

きんなら王有。ほうきんなら王・めう法きんなら王・大

法きんなら王、⁽²⁾をのく、そこばくの百千のけんぞく

と共也。四のけんだつば(王)有。げうけんだつば王・げう

おんけんたつば王・みけんたつばわう・みをんけん

たつば王也。各く、そこばくの百千のけんぞくと

とも也。四のあしゆら王有。ばちあしゆら王・からきん

7 たあしゆら王・びましつたらあしゆら王・らこあしゆ

ら王・おのくそこばくの百千のけんぞくと共也。⁽¹⁾四の

かるら王有。大いとくかるら王・大しんかるら王・大ま

むかるら王・によいかるら王也。おのく、そこばくの

百千のけんぞくと共也。いだいけの子、あじやせわう、

そこばくの百千のけんぞくと共也。おのく佛の

みあしをらいして、しりぞいて一めんにざす。⁽²⁾其

時に、世尊、四しゆにいねうせられて、くやうくきや

8 う、⁽³⁾そんちうさんだんせられて、⁽⁴⁾もろくの菩薩

のために、大ぜう經をとき玉ふ。むりやうぎ・げ

う菩薩法・佛しよこねんとづく。佛、此經を

ときおはつて、⁽¹⁾けつつかふざして、むりやうぎしよ三

まいにて、⁽²⁾しんじん、うごきたまはず。此時に、天よりまか

まんだらけ・まんしゆしやけ・まかまんしゆしやけ

をふらして、佛のみうへ、およひ諸くの大しゆにちら

し、あまねく佛のせかい、六しゆにしんどうす。⁽³⁾其

9 時に、衆中のびくく・うばそく・うばい・天・りう・

(1) 釈提桓因の連声

(2) 復(原本)

(3) 俱(原本)

(4) 俱(原本)

(5) 眷属

(1) 以下に脱あり(補注)

(2) 以下に脱あり(補注)

(1) 眷属

(2) 俱(原本)

(3) 坐しぬ。

(4) 開導せられたまひ。

(5) 供養恭敬し

(6) せられたまへり。

(1) 以下に脱あり(補注)

(2) 三昧にいりて

(3) 是時(原本)

(4) 爾時(原本)

やしや・げんたつば・あしゆら・かるら・きんなら・まこら
らが・人・び人、およびもろくの小王・天りんしやう王、
此もろくのとしゆ、みぞう成事をえて、くわん
ぎし、がつしやうして、一しんに佛を見奉る。其⁽²⁾
時に、佛、みけんびやくがうさうのひかりをはなつて、
東方万八千の世界をてらし玉ふに、しゆへんせぞ⁽³⁾
るといふ事なし。下、あびぢごくにいたり、上、あかにた
10 天にいたるまで、此せかいにおいて、ことくかのどの六

- (1) 未曾有なることとて
(2) 爾時(原本)
(3) はなちて
(4) 周遍せず
(5) いたる
(6) この世界にして

しゆの衆生を見、又、かのどのげんざいのしよ佛を見
奉り、およびしよ佛のしよせつの經法をき、ならび
にかのもろくのびく・く・に・うばそく・うばいのもろ
くのしゆ行し、とく道するをみ、又、もろくの菩薩
まかさつのしゆくのいんゑん、しゆくのしんげ、しゆくの
さうめう有て、菩薩の道を行するをみ、又、しよ佛の
はつねはんし玉ふをみ、又、しよ佛、はつねはんの後、
11 佛のしやりををもて、七ほうのたうをたつるをみる。

- (1) 衆生おみたまふ
(2) あはせて
(3) ものをみてまつる
(4) 般涅槃したまひてのち

其時に、みろく菩薩、此ねんをなさく「今、世尊、じんべん
のさうをげんじ玉ふ。なんのいんゑんをもてか、しか
も、此ずい有。今、佛世尊、さんまいに入たまふあり。
是ふかしぎして、け有事をげんしたまふ。まさ
にもて、たれにかとうべき。たれかよくこたへん
もの。」又、此ねんをなさく、「是もんじゆし法王のみ
こは、すでにむかし、くわこのむりやうのしよ佛にし
12 んごむし、くやうじ奉る。かならず此け有のさう

- (1) このをもひ
(2) 「しかも」ナシ
(3) 希有の事お現せるを
(4) このをもひ
(5) 「すでに」ナシ
(6) 供養せり。

をみたもふべし。我、今、まさにとひ奉るべし。其時
に、びく・く・に・うばそく・うばい、およびもろくの天
りう・きじんとう、ことく此ねんをなさく「此佛の
くわうみやうじんづうのさうを、今、まさにたれにか
とうべき。其時に、みろく菩薩、みづからうたがいを
けつせんとおもひて、又、四しゆのびく・く・に・うばそく・
13 うばい、およびもろくの天りう・きじんのしゆ(ゑ)の心を
くわんじて、しこうじて、もんじゆにといひわく、「なん

- (1) みたるへし。
(2) とふへし。
(3) このおもひ
(4) 相をは

のいんゑんをもてか、此ずいじんづうのさうましまして、
大くわうみやうをはなつて、とうほう八千どをてらし
たまふに、ことくかの佛の国かいのしやうごんを
みる。こ、に、みろく菩薩、かさねて此儀をのべんと
おほして、げおもてといひわく、「もんじゆしり、だう
し、なんかゆへぞ、みけんびやくがうのたいくわう、あま
ねくたらし玉ふ。まんだらけ・まんしゆしやけおふらし
て、せんだんのかうばしき風、しゆのこ、ろをまつす。
14

- (1) まします。
(2) てらして
(3) みせしめたまふ。
(4) をはきなるひかり

此いんゑんをもて、地、みな、ごんしやうなり。しこうじて、此
世界、六しゆにしんどうす。時に、四ふのしゆ、ことくくみな
くわんぎし、身意、けいねんとして、みぞう成事
をう。みけんのくわうみやう、とうはうの八千どを
てらしたまふに、皆、こんじきのごとし。あびぢく
より、上にうちやうにいたるまで、もろくの世界の
中の六道の衆生のしやうじししゆ、ぜんあくのご
うゑん、しゆほうのかうしゆ、こ、におゐて、ことくく
15

- (1) かうと兩舎乱れ
(2) 快然として
(3) 未曾有なることとて
(4) 八千の土
(5) 生死の所趣
(6) ここにして

みる。又、しよ佛のしやうしゆし、を見奉る。經でん
をゑんぜつし玉ふ事、みめう大一也。其こゑ、しやうく
にして、にうなんのみこゑを出して、もろくの菩薩
をおしゑ玉ふこと、むしゆおく万人、ぼんをん、しんめう
にして、人をしてきかんとねがはしめ、各く、せかいに
おいて、正法をかうせつし玉ふ。しゆくのいんゑんを
もてし、むりやうのたとへをもて、佛法をせうみやう
16 して、衆生をかいこせしめたまふ。若、人、くにあふて、ら

- (1) たてまつれば、
(2) みこゑ
(3) 「して」ナシ
(4) 億万なり。
(5) ねかはしむ。
(6) 世界にして
(7) 「もてし」ナシ

う・びやう・しをいとふには、ためにねはんのといひて、もろ
くのくさうをつくさしめ玉ふ。若、人、ふく有て、むかし、
佛をくやうし、勝法をしぐうするには、ために、ゑんがく
をときたまふ。若、佛師有て、しゆくの行をじゆして、
むりやうのゑをもとむるには、ために、淨道をとき
たまふ。もんじゆしり、われこ、にちうして、けんもん
する事、かくのごとく、千おくの事におよべり。かくの
ことくしゆだなり。今、まさにりやくしてとくべし。
17

- (1) 涅槃をときて(連声)
(2) つくさしむ。
(3) ころさしもむる
(4) 佛子
(5) 無上の
(6) ことし。
(7) 衆多なるを、

- 我、彼どのこうしやの菩薩、しゆくゝのいんゑんをもて、しこう(1)しかして(開合の乱れ)じて、佛道をもとむるをみる。あるひは施をぎやう(2)語順の相違補注4する。こんくゝ・さんこ・しんしゆ・まに・しやこ・めのう・こんがう・(3)行するに(4)もろもろのたから(5)「もて」ナシ(6)ところなる(7)宝車の
- 18 かい有て、かんじきせるをふせするあり。又、ほさつ(1)施して(2)ほとけのみもと(3)鬘髪を(4)ほめたまはつる(5)とひたてまつる、
- 19 かもびくと成て、ひとりげんしやうにしまして、ねがつて(1)禪定四つ仮名(2)安禪合掌して(3)諸法の王(4)ほめたまはつる(5)とひたてまつる、
- 20 さいいて、ことくくしゆちするをみる。又、佛子の(1)欣樂説法して(2)やふり(3)「しこふじて」ナシ(4)法鼓(5)「是を」ナシ(6)いまたむかしにも
- 21 しむるをみる。又、佛子の、いまだかつてすいめん(1)施して(2)ほとけのみもと(3)鬘髪を(4)ほめたまはつる(5)とひたてまつる、
- 22 せすして、りん中(1)もとむる(2)惡罵捶打するを(3)しのひて
- 23 せすして、りん中(1)もとむる(2)惡罵捶打するを(3)しのひて
- 24 しよぢやくなくして、此妙をもち、無上道をもとむる(を)見る。もんしゆしり、又、菩薩の、佛めつどの後、しや(1)ほとけの(2)施し(3)微妙なるを(4)「して」ナシ(5)「は」ナシ(6)いまたむかしにも
- 25 りう神・人、およびひ人、かう・け・ぎがく、つねにも(1)ほとけの(2)施し(3)微妙なるを(4)「して」ナシ(5)「は」ナシ(6)いまたむかしにも

てくやうず。もんじゆしり、もろくの佛子とう、しや
りをぐうぜんがために、たうめうおごんじきす。國
かいじねんにして、しゆどくめうかう成事、天のしゆ王の
その花かいふせるがごとし。佛、一つのひかりをはなちた
まふに、我、およびしゆゑ、此國かいのしゆくにしゆめう成
を見る。しよ佛は、神力・智ゑ、けう也。一つの浄光をは
なちて、むりやうの國をてらしたまふ。われら、是
26をみて、みぞう成事をう。佛子もんしゆ、ねか

- (1) 希有にまします。
(2) 未曾有なることえつ。

わくは、しゆのうたがひをけつし玉へ。四しゆ、ごんがう
して、きみおよび我をみる。世尊、なんがゆへぞ、
此くわうみやうをはなちたまふ。佛子、時に、こたへてい
わく、うたがひをけつして、よろこばしめよ。なん
のねうやくしたまふ所有てが、このくわうみやうを
のべたまふ。佛、道場にして、あたまる所の妙法、是
をときたまわんとおほすとやせん。まさにじゆぎ
27したまふべしとやせん。しよ佛の土のしゆほうごん

- (1) 仁をみ、われにをほす。
(2) 「いわく」ナシ
(3) よろこはしたまへ。
(4) 饒益するところ
(5) 道場に座して
(6) これをとかんと
(7) もろあつたからをもて

しやう成をしめし。および諸佛をみせしめ奉る事、
是、おほろけのゑんにあらじ。「文殊」まさにしるべし、四
しゆ・りう神、にんじやをせんさつす。ためにとき
たまへ。なんらそ。其時に、もんじゆしり、みろくば
さつまかさつ、および諸くのだいじにかたらく、「ぜん
なんしら、わがゆいじゆむするがごときは、今、佛
世尊、大法おとき、大法の雨をふらし、大法のかい
28をふき、大法のつゝみうち、大法のぎをのべん

- (1) 厳浄せるをしめし、
(2) みせしめたまふ
(3) 小縁
(4) かたはらく
(5) 善男子等
(6) こときは

とおほすならん共はつしたまふ。諸くのぜんなん
し、われ、くわこの諸佛におゐて、むかし、此ずい
を見しかども、此ひかりをはなちおはつて、則、大法をと
きたまひ、此ゆへに、まさにしるべし、今の佛のひ
かりおげんじ玉ふこと、又々かくのごとし。しゆ生をし
て、ことくくさいせけんなんしんの法をき、し
るとなり。もんぢする事をゑしめんとほつした
29まふ。かるがゆへに、此ずいをげんじ玉へる也。もろ

- (1) みしかは、
(2) おはりて
(3) ことも
(4) 語順の相違補注6

くのぜんなんし、くわこのむりやうむへんふがしぎ
あそぎごうのごとき、其時に、佛います。日月
とうみやう如来・おうぐ・正へんち・みやうきやうそく・
ぜんぜい・せけんげ・む上し・でうごちやうぶ・天人し・
佛・世尊とかうし奉る。正法をゑんぜつし玉ふ。
四十二年・せん・中せん・こせん也。其義、じんおんに、そのこと
けうめうにして、じゆむ一にしてまじわりなく、
ぐそく清白にして、ばんきやうのさうなり。しやう
30

- (1) ましましき。
(2) なつく。
(3) 演説したまふこと、
(4) みこと
(5) 巧妙なり。
(6) 具足清白、

もんをもとむるもの、ためには、おふせる四たいの
法をといて、しやう・らう・びやう・しをどし、ねはんを
くぎやうせしめ、ひやくし佛をもとむるもの、た
めには、おふせる十二いんえんの法をとき、諸
の菩薩のためには、おふせる六はらみつおといて、
あのかたら三みやく三ばだいをゑ、一さいしゆち
をしやうせしめ玉ふ。つぎに又、佛います。又、日月
とうみやうとなづけ奉る。つぎに又、佛います。
31

- (1) 死を度して、
(2) 涅槃に
(3) たまひき。
(4) ましましき。
(5) なつく
(6) ましましき。

又、日月とうみやうとなづけ奉る。かくのごときの
二万の佛、みなおなじく、一じにして、日月とう
みやうとかうし奉る。又、おなじく、一姓にして、
らたをしやうとす。みろく、まさにしるべし、諸
佛、後佛、皆同じくひとつあさなにして、日月とう
みやうとなづけ奉る。十かう、ぐそくしたまへり。
とき玉べき所の法、初中ごぜん也。其さいこの仏、
32いまた出家したまはざりつし時、八王子あり。ひ

- (1) (3) (7) なつく。
(2) かくのごとく
(3) なつく。
(4) 姓とせり。
(5) はめははるのひとき
(6) 字左画びとあさな
(8) たまはざりしとき
(9) ましましき。

とりをば、うゑとなづけ、ふたりおは、せんいとな
つけ、三をはむりやういとなづけ、四をはほう
いとなつけ、五をはぞういとなつけ、六をは
ぢよぎとな付、七おはかういとな付、八おは法い
となつく。此八王子、いとくぢざいして、おのく
四天下をりやうす。此もろくの王子、ち、の出
家して、あのかたら三みやく三ばたいをゑ玉ふ。
33をきいて、ことくく王位をすて、又、したか

- (1) 一
(2) 二
(3) ちち、
(4) えたまひつ。
(5) すて

つて出家して、大ぜうのこゝろをおこし、常にほんきやうをしゆして、皆、法師なれり。すでに千萬佛のみもとにおいて、もろくのぜんほんをうへたり。此時に、日月とうみやう仏、大ぜう經をとき玉ふ。むりやうぎ・げうぼさつ法・佛所こ

ねんとなづく。此經をときおはりて、則、大しゆの中におゐて、けつかふざし、むりやうぎしよ三まいに入て、

34 身心とうじたまわす。此時に、天よりまんだらけ・ま

かまんだらけ・まんじゆしやけ・まかまんじゆしやけおふらして、佛のみうへ、およひもろくのの大しゆにちらして、あまねく佛の世界、六しゆにしんどうす。その時に、衆中のびく・ひぐに・うはそく・うはい・天・りゆう・やしや・けんたつば・あしゆら・かるら・きんなら・まごらが・人・び人、およひもろくの小王・てんりんしやう王とう、此もろくのの大しゆ、みぞう成事をえて、くわんざし

35 がつしやうして、一心に佛をみ奉る。其時に、如

来、みけんのびやくがうさうのひかりおはなちて、とう方万八千の佛土をてらし玉ふに、しゆへんせずといふ事なし。今のみ奉る所の此しよ佛の土のごとし。みろく、まさにしるべし、其時に、衆中に二十おくの菩薩有、ねがつて法をきかんとほつす。此諸々のぼさつ、此くわうみやうのあまねく佛土をてらすみて、みぞう成事をえて、此ひかりのしよ

36 いのいんえんをしらんとほつす。時に、菩薩有。なづけ

て、めうくわうといふ。八百のでし有。此時に、日月とうみやう佛、三まいより立て、妙光菩薩によせて、大ぜう經をとき玉ふ。妙法蓮華經・〔教〕菩薩法・佛所こねんとなづくるをとき玉ふ。六十小こう、ざをたちたまわす。時のゑにき・しもの、又一所にざして、六十小こう、身心とうせす。佛のしよせつをきく事、じききやうのこしとおもへり。此時に、しゆ中に一人

37 の、もしはみもしは心に、しかも、けけんをなす

(1) 法師たり。

(2) みもとにして、

(3) ときたまふとおはりて

(4) 大衆のなかにして

(5) うこき

(1) 摩訶曼殊沙華ありて

(2) 散し、

(3) 会のなか

(4) 未曾有なることえて

(5) 歡喜白掌し、

(1) なくして、

(2) いまみる

(3) 会のなか

(4) 法をきかんと樂しき

(5) てらせる

(6) 未曾有なることえて

(7) おもふ。

(1) 〔教〕の字、脱

(2) ところへときたまふ

(3) うこかす

(4) 衆のなかに

(5) 一人として

(6) 懈倦をなすもの

有事なし。日月燈明佛、六十小こうにおゐて、此經をときおはりて、則、ほん・ま・しやもん・ばらもん、および天人・あしゆらしゆの中におゐて、しかも此こと

ばをのべたまわく、「如来は、今日のちう夜において、まさにむよねはんに入玉ふべし」ときに、ぼさつ有。なづけてとく僧といふ。日月燈明佛、則、その記をさづけ玉ふ。もろくのびくににつけたまはく、「此とくそう菩薩は、〔つきに〕まさにさぶつすべし。」

38

〔なづけて〕淨身・たゝあかど・あらか・三みやく・三佛だといわん。』佛、じゆきしおはりて、則、ちう夜において、むよねはんに入たまふ。佛のめつどの後、妙光菩薩、妙法蓮華經を持して、八十小こうをみて、人のためにあんぜつし玉ふ。日月燈明佛の八の子、みな妙光を師とす。妙光、けうけして、それおして、あのかたら三みやく三ばだひにけんこなら

39 しむ。此もろくの王子、むりやう百千万お

くの佛をくやうじおわりて、佛道をしやうす。其さいこに成仏したまふ。なづけて、ねんとう佛といふ。八百のでしの中に、一人有。かうして、ぐみやうといふ。利やうにとんぢやくせり。又、しゆ經をどくじゆすといへとも、しかも、つうりならずして、まうしつする所おほかりき。かるがゆゑに、ぐみやうとかうす。此人、又、もろくのぜんこんをうへたるいんえんをもてのゆゑに、むりやう百千万おくのしよ佛

40

にあひ奉る事をえて、くやうじくぎやうし、そんぢうしさんだんす。みろく、まさにしるべし、其時の妙光菩薩は、あにこと人ならんや。わが身、是也。今の此ずいをみるに、もど、事成事なし。此故に、ゆいじゆんするに、今日の如来も、まさに大ぜう經の妙法蓮華・經菩薩法・佛所ごねんとときなづくるを玉ふべし。其時に

41 もんじゆしり、大しゆの中にして、かさねて此

(1) 六十小劫に、

(2) きたまふをほりて

(3) なかにして、

(4) 〔しかも〕ナシ

(5) 中夜に

(6) 徳蔵

(7) それに記を

(8) 記をさづけて、

(9) ほとけになるへし。

(1) 中夜に

(2) いたまひき。

(3) たもちて、

(4) 満するまでに、

(5) 演説す。

(6) 八子

(1) 供養するをほりて、

(2) 佛道なりにき。

(3) ほとけになりしをは、

(4) なづけて、

(5) もろもろの經

(6) おほし。

(7) なつく。

(1) あふことえて

(2) 供養恭敬し

(3) 尊重讃歎せり。

(4) 妙光菩薩、

(5) 以下に脱文〔補注〕

(6) 本

(7) 惟付す。

(8) 經は教あへきと

ざおのべんとおぼして、しかも、げおときてい
わく。⁽²⁾

「我、くわ⁽³⁾世のむりやうむしゆこうお思ふに、佛、人
中尊いましき。日月燈明とかうし奉る。世尊、
法をえんぜつして、むりやうの衆生、むしゆお
くの菩薩をどして、佛のちえに入しめたまふ。⁽⁴⁾
佛、いまだ出家したまはざりし時に、所生の⁽⁵⁾

42 八王子、大しやうのしゆつけをみて、又、したがつて、

ばんきやうをしゆす。時に、佛、大ぜう經のむりやう
ぎとなづくるとき玉ひて、もろくの⁽¹⁾大
しゆの中にしして、しかも、ためにひろくふんべつ
し玉ふ。佛、此經をときたまふ事おわりて、則、ほう
ぎのうへにおゐて、かふして三まいにざしたまふ。
むりやうぎしよとなつく。天よりまんだらけお
ふらし⁽³⁾てんのつゞみ、じねん〔に〕なり、しよ天りう・き

43 じん、人中のそんをくやうじ奉る。一さいの

しよ佛の土、そくじにおほきにしんどうす。佛、
みけんのひかりおはなちて、もろくの⁽¹⁾け有の
じおげんし玉ふ。此ひかり、とうほうの万八千の
佛土をてらし玉ひて、一さいしゆじやうのしやうじ
ごつほうの所おしめしたまふ。しよ佛の土の、しゆ法⁽³⁾
をもてしやうこんして、るり・はりの色なるを
見る事有。是、ふつくわうのてらすによつて

44 也。およびもろくの⁽¹⁾天人・りう神・やしやしゆ・け

むだつ・きんならの、おのく其佛をくやうじ奉
るをみ、又、もろくの⁽¹⁾如来の、じねんに仏道をしやう
じたまひて、身のいろ、こんせんのごとく、たんごんに
して、はなはだみめう成事、しやうるりの中に、
うちにしんごんのぞうおけんするがごとく成を
みる。世尊、大しゆにまし⁽³⁾て、しん法のぎおふ
ゑんしたまふ。一一のしよ佛の土、しやうもんのしゆ、む
45 しゆ也。ふつくわうのしよせうにより、ことく

(9) 「はまき・高き・高き・高き」

(1) 「しかも」ナシ

(2) のたまはく

(3) 過去のよ

(4) おもへは

(5) ましましき。

(6) なつく。

(7) 「語順の相違」補注も

(8) 生ぜるところ

(1) 「しかも」ナシ

(2) 法座のうゑにして

(3) 曼陀華ふり

(4) もろもろの

彼大しゆを見る。あるひは、もろくの⁽¹⁾びくの、せんりん
の中に有て、しやうじんして、淨戒をたもつ事、
なをみやうしゆをまもるがごとくなる有⁽¹⁾。又、もろ
くの⁽¹⁾菩薩の、施・にんにくとうおぎやうずる事、そ
のかず、ごうしやのごとく成をみる。これ、ふつくわうの
てらし玉ふによりて也。又、もろくの⁽¹⁾菩薩の、ふかく
もろくの⁽¹⁾せんちやうに入て、しんじん、しづかにとうせ
すして、もつて無上道をもとむるをみる。

46 又、もろくの⁽¹⁾菩薩の、法のしやくめつのさうおしつて、

おのくその國土にして、法をときて佛道をも
とむるを見る。其時に、四ぶのしゆ、日月燈明佛
の大じんづうりきおげんじ玉ふをみて、その心
〔皆〕くわんぎして、おのくみづからあいとわく、〔此事
は、なんのいんえんぞ。〕天人、しよぶのそん、はじめて
三まいより立て、妙光菩薩をさんじたまはく、

47 『なんちは、世けんのまなこたり。一さいにきしんせ

られて、よくほうさうをぶちす。わがしよ〔説〕の法のごとき、
たゞなんちのみ、よくせうちせり。』世尊、すでに
〔讚歎して〕くわんぎして、妙光をして、此法花經をとき玉ふ
事、六十小こうをみつるまでに、此ざお立たまわ
ず。しよせつの上妙法を、此めうくわうはつしに、こと
く皆よくじゆちす。佛、この法華〔經〕ときた
まひて、しゆをして、くわんぎせしめおはりて、つゐ
まひて、則、此日において、天人しゆにつげたたまはく、『しよ

48 佛のしつさうのぎ、すでになんぢらがためにとく、

われ今、ちう夜にして、まさにねはんに入べし。
なんぢ、一心にしやうじんして、まさにほういつをは
なるべし。諸佛には、はなはだあひがたし。おつこう
に、ときに一度あひ奉る。』世尊のしよら、佛
のねはんに入たまひなんとすときいて、か
つかくにひのうおいたく。『佛のめつし玉ふ事、いとなん
そすみやかなる。』しやうしゆ・法の王、むりやう

(1) するあり。

(2) ほとけのひかり

(3) しかにとうへず、

(1) 菩薩、

(2) しりて

(3) ほめたまはく

(1) 稱讃するところとて、

(2) わがところの

(3) たたし

(4) 妙光をして讃嘆しめて、

(5) きたまふの上妙法

(6) 法師

(7) 受持しき。

(8) 歎せむるごとき

(1) なたち

(2) ときつ。

(3) 中夜に、

(4) あなまるとかた。

(5) とときありて、

(6) 諸子等

(7) いたまはんとときき、

(8) すみやかなるかな。

- 〔衆〕をあんいしたまはく、「われもしめつどしなん時に、なんぢら、うぶする事なかれ。此とくさう菩薩(3)つは、むろのじつさうにおゐて、ころにすでにつうだつする事をえたり。それ、つぎにまさにさぶつすべし。なを、しやうじん(と)せん。又、むりやうのしゆをどせん。佛、此夜にめつどしたまふこと、たきつきて、火のめつするがごとし。もろくのしやりをぶんぶして、しこふして、むりやうのたうをたつ。
- 50 びく、びくに、其かづこしやのごとし。ますく、又、しやうじんをくわへて、もて、むりやうのたうをもとむ。〔是〕妙光ほつし、佛の法さうをおちして、八十小この中、ひろく法花經をのぶ。此もろく(の)八王子、めうくわうにかいけられて、無上道にけんごにして、まさにむしゆの佛をみ奉るべし。しよ仏をくやうじ奉りおはつて、ずいじゆむして、又道を行じ、あひついで成佛する事をえて。
- 51 てんじに、しかも、じゆきし玉ふ。さいごの天中天、かうして、ねんどう佛といふ。しよせんの導師として、むりやうのしゆをどだつし玉ふ。此めうくわう法師に〔時に〕、ひとりのでし有。心に常にけたいをいだひて、みやうりにとんちやくせり。みやうりをもとむるにあく事なくして、おほくそくしやうの家にあそぶ。しゆじゆする所をさしやして、はいもうして、つうりならず。此いんゑんをもつてのゆへに、是をかうして、ぐみやうとす。又、もろく(の)ぜんごうを行じ、むしゆの佛をみ奉る事をえて、しよ佛をくやうじ、ずいじゆむして、大道を行じ、六はらみつとぐして、今、しやくし、をみ奉る。それ、後にまさにさぶつすべし。なをはなづけて、みろくといわん。ひろく諸々の衆生をとして、其かづ、はかり有事なけん。彼國(の)めつどの後に、けだいなりし〔者〕は、なんじ是也。妙光法師といつは、今、則我が
- (1) なんだち
(3) 菩薩
(4) 通達することたり
(5) ほとけになるへし
(6) ひのきゆる
(7) 「しこふして」ナシ
(1) ますますに
(2) 「もて」ナシ
(3) 無上道
(4) 法師
(5) みだてまつるへかりき
(6) 供養することほりて
(7) ほとけになることとて
(1) 転次し、
(2) 「しかも」ナシ
(3) 授記す。
(4) 天中天を、は
(5) なづけて
(6) 燃灯佛といひき。
(7) 無量の衆を度脱す
(8) ならい誦せること
(9) 魔(は)忘(わう)開(かい)合(ごう)の乱れ
(1) なづけて
(2) ほけをだてまつること
(3) ほとけになるへし
(4) 衆生をわたすこと
(5) かす(数)四つ假名
(6) なんぢ汝(四つ假名)
(7) 妙光法師といひしは、

- 身、是なり。われ、燈明佛(を見しかば)のものとくわうずい、かくのごとく成をみ奉る。爰をもつて、しんぬ。今の仏も法花經をとかむとほつしたまわん。今のさう、もとのずいのごとし。是、諸佛のはうべん也。いまの佛のくわうみやうをはなしし玉ふ事も、ぢつそのぎをぢよほつしたまはんと也。しよ人、今まさにしるべし。がつしやうして、一心にまちたてまつれ。佛、まさに法の雨をふらして、ぐだうのものをじうそくせしめ玉ふべし。諸々の三ぜうをもとむる人、もしはぎけあらば、佛、まさにためにぢよたんして、ことくくして、あまり有
- 55 事なからしめたまふへし。』
- (1) 諸順の相違〔補注9〕
(2) しりぬ。
(3) おほせるなり。
(4) 助発せんとなり。
(5) もろろのひと
(6) たなころをあはせ
(7) ころをむいて
(8) 法雨
(1) 道をとむるものに
(2) 充足したまふべし。
(3) つくして
(4) のこり

- 【補注1】冒頭の「如是我聞」の訓読は敬語使用の面から次の三種に大別され、各資料の性格を端的に示す指標となる。
- ① 謙譲の「給フ」が古格通りに使用されているもの。「如是のことをわれ聞きたまへき。」(伝後京極良経假名法華經切) ② 「給フ」が四段化しているもの。「かくのごときことを、われ、きたたまへりき。」(妙一本、足利本等) ③ 「給フ」の使用の見られないもの。「かくのごときを、われ、き、き。」(月ヶ瀬本等) おのおの、若干百千の眷属とともになり。(九・3) 持法緊那羅王なり。(九・5) われかの土をみれば、恒沙の菩薩、種種因縁をもて、仏道をもとむ。(二四・6) (二五・1)
- 【補注2】また、佛子をみれば、もろもろの塔廟をつくること、无数恒沙にして、国界を嚴飾す。(三四・3) (三四・5)
- 【補注3】衆生をして、ことごとく一切世間難信の法を聞知することえしめんとおほすかゆへに、この瑞を現しまふなり。(四〇・4) (四〇・6)
- 【補注4】求名菩薩は、なんちか身、これなり。(五六・5)
- 【補注5】無量の衆生をわたし、無數億の菩薩をほとけの智慧にいらしむ。(五八・2) (三) われ、灯明佛をみしかば、本の光瑞、かくのごとし。(七三・6) (七四・1)